

有田地域における「きゅうき」導入推進の取り組み

有田振興局農林水産振興部農業水産振興課
普及グループ 上山 智史

1. はじめに

有田振興局農業水産振興課では、平成27年度からの3か年間、「有田みかん産地の活性化」～モデル共選を育成、産地へ普及～を普及重点課題として取り組んでいる。その中で、近年問題となっている浮皮等の発生による品質低下の対策として、有田市宮原町において、果樹試験場の枝変わり探索事業により向山温州の一樹変異として発見され、浮皮の発生が少なく食味が早生に近い「きゅうき」を導入し、指導対象である有田川町のマル賢共選組合やJAありだ等の関係機関と連携しながら、現地での調査や検討会等を行っている。

2. 調査園の概要

マル賢共選組合は早生品種の完熟出荷に特化しているため、秋期に温暖多雨の場合、特に出荷後半の品質確保が課題だったことから、管内でいち早く試験的に導入した。

- ・高接（6園）：果実品質の推移を把握するため、予備的に実施
平成24年実施、26年～着果
- ・苗木（16園）：平成27年・28年植付、29年～一部の園で着果
適地性を把握するため、標高・方位を分散し、平坦地にも植付

3. 調査結果

(1) 高接ぎ樹の果実品質

平成27年～29年の3年間の平均について、早生と比較すると、糖度・クエン酸ともほぼ同じ推移であった（図1）。

また、浮皮の発生状況も、ほぼ同等であった（図省略）。

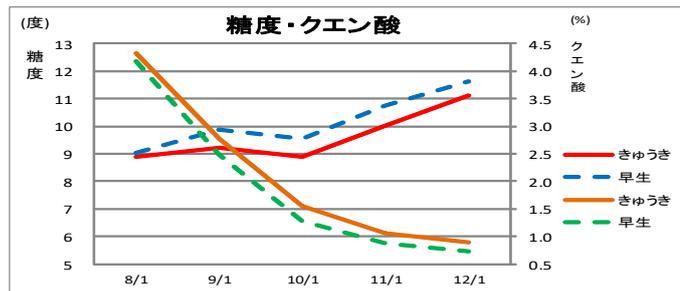


図1 果実品質の推移（高接）

(2) 苗木の果実品質

平成27年植付園のうち、3園地が29年に着果に至ったため調査したところ、早生より糖度はやや高く、クエン酸はほぼ同じ傾向で推移した（図2）。

また、浮皮の発生状況はほぼ同等であった（表1）。

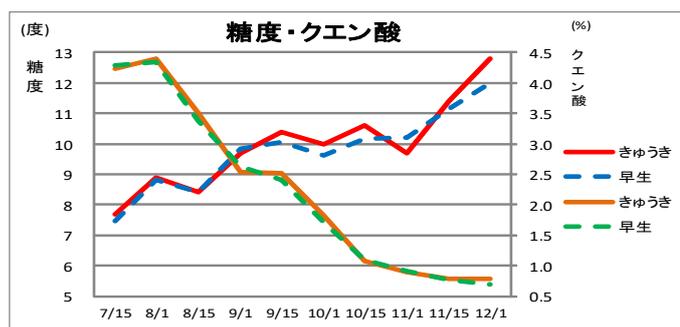


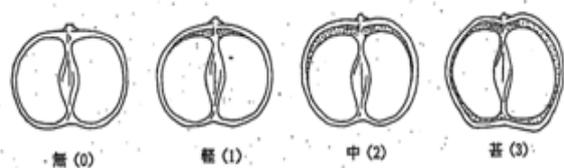
図2 果実品質の推移（苗木）

表1 浮皮果の発生状況（平成29年12月1日調査）

品 種	発生率(%) ※1	浮皮度平均 ※2
きゅうき	66.7	0.90
早 生	53.3	0.73

※1：調査果実のうち浮皮度が1以上と判定された果実の割合

※2：触感で浮皮程度を無・軽・中・甚の4段階で評価(右図)



(3) 植付後の生育

苗木園について植付後から年2回、樹容積と幹周を測定した。園地による生育の差が顕著で、昨年8月調査時点の樹容積が、27年植付園は4.5倍程度、28年植付園は7倍程度の開きがあった(図4)。また、幹周の状況も同様で(図省略)、要因の1つとして谷水の利用等によるこまめなかん水の有無が考えられる。

また、苗木の着花抑制対策として昨年11月にジベレリンを散布しており、開花時期の調査結果とあわせ、樹冠拡大の管理方法について検討していく。

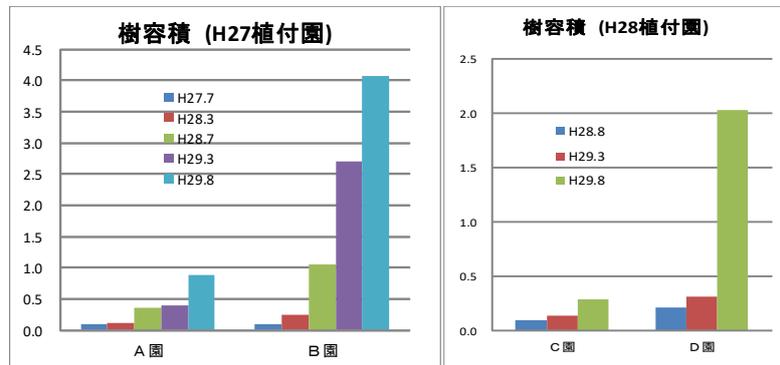


図4 樹容積の推移

4. 現地検討会等の開催

マル賢共選以外でも、JAありだAQ選果場を中心に、平成26年から試験的な導入が始まったことから、主な園地を巡回して状況を確認するとともに、着果園での調査を平成29年より始めた。また、果樹試験場の協力を得て、関係機関だけでなく栽培農家や「きゅうき」の育成者である久喜護氏を交えて、収穫前の現地検討会や簡易貯蔵した果実の試食検討会も実施した(写真1、2)。試食会は1月31日に行い、12月7日の収穫後、コンテナをタイバックで包み貯蔵していた果実の食味を確認した。実際より長期間だったが、味ぼけや貯蔵臭が無く、商品としての可能性は十分確認できた。



写真1 現地検討会



写真2 試食検討会

5. 今後の推進方向

マル賢共選組合は「きゅうき」の導入を進めることを決定し、有田管内においても、年々栽培面積の増加が見込まれることから、苗木の生育調査結果や果樹試験場が平成28年に作成した導入に当たっての注意点(写真3)を活用して、植付後の管理の重要性を啓発していく。

また、苗木からの着果も始まったばかりで、糖度や浮皮の発生等、現地での状況が様々であるため、管内の調査園地を増やすとともに、摘果や剪定等の基本管理を含む栽培マニュアルの作成を果樹試験場と進めていく。

平成29年産の温州みかんは全国的な生産量の減少から、特に年末年始にかけて記録的な価格となった。30年産以降もこのような状況とはいかなくとも、気象条件に左右されず、高品質なみかんを安定して消費者に届けることが重要であるため、今後も関係機関や農業者とともに「有田みかん」の産地を守る取り組みを継続する。



写真3 導入に当たっての注意点